

(18) トルコギキョウ

ア 各病害虫の防除

炭疽病

灰色かび病

斑点病

えそ病

えそ萎縮病

黄化えそ病(TSWV)、えそ斑紋病(INSV)、えそ輪紋病(IYSV)

モザイク病(BBWV)、えそモザイク病(CMV)、輪紋病(WMV)

アザミウマ類

アブラムシ類

シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ

ハダニ類

タバココナジラミ

ア 各病害虫の防除

【留意事項】

(□は総合防除計画に掲載している病害虫)

炭疽病

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病株を抜き取る。
- 2 頭上かん水をしない。

※炭疽病菌の胞子は、雨滴やかん水の飛沫に乗って周辺に拡散する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病初期から、薬剤を施用(散布)する。

※ジマンダイセン水和剤は、葉の汚れが激しいので生育後期には使用しない。

灰色かび病

(耕種的・物理的防除)

- 1 施設は換気を良くし、湿度を下げる。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生初期から、薬剤を施用(散布)する。

斑点病

(耕種的・物理的防除)

- 1 施設内を換気する。
- 2 発病部位を取り除き、ほ場外へ持出し処分する。
- 3 普通栽培、抑制栽培のいずれの作型も発病するが、特に普通栽培でリスクが高い([令和6年成果普及情報](#))。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病初期から薬剤を施用(散布)する。登録農薬はいずれも効果が高いためローテーション散布を心がける。
- 2 発病ほ場では栽培終了から残渣撤去までにキルパーを水で希釈し、土壌表面に散布又は灌水を行う。

※キルパーの処理方法詳細は、[共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照する。

- 3 気温が高い時期ほど発病するまでの期間が短いため、気温が高い時期には散布間隔を短くすることが適当である(令和6年成果普及情報)。

えそ病

(耕種的・物理的防除)

- 1 連作を避ける。
- 2 排水を良くして過湿を避ける。
- 3 太陽熱や蒸気により土壌消毒をする([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。

えそ萎縮病

(耕種的・物理的防除)

- 1 連作を避ける。
- 2 土壌還元消毒法などにより土壌消毒をする([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。

※病原ウイルス(L i N S V)は媒介者を要しない物理的な接触伝染により土壌伝染する。

※クロロピクリンによる消毒効果はやや低い。

黄化えそ病(T S W V)、えそ斑紋病(I N S V)、えそ輪紋病(I Y S V)

(耕種的・物理的防除)

- 1 ウイルスの伝染源となるため、ほ場周辺に感染しやすい野菜や草花を植え付けない。
- 2 ほ場周辺の雑草はアザミウマ類の飛来源及びウイルスの伝染源となるため除草し、ほ場衛生に努める。
- 3 アザミウマ類は花粉を好みそれを餌として増殖するため、草花などをハウス内に持ち込まない。
- 4 発病株は直ちに抜き取り処分する。

- 5 媒介昆虫であるアザミウマ類の防除をする。
※アザミウマ類によって媒介される。

(薬剤防除)

- 1 [本項のアザミウマ類の防除](#)に基づき防除を行う。

モザイク病(BBWV)、えそモザイク病(CMV)、輪紋病(WMV)

(耕種的・物理的防除)

- 1 寒冷紗で覆いアブラムシの侵入を防ぐ。
※アブラムシ類によって媒介される。
2 ほ場周辺の除草をする。
3 発生株を直ちに抜き取る。
4 刃物によって汁液伝染するので注意する。

(薬剤防除)

- 1 [本項のアブラムシ類の防除](#)に基づき防除を行う。

アザミウマ類

- ・ [共通防除の章のアザミウマ類の防除の項](#)を参照する。

(耕種的・物理的防除)

- 1 施設内への侵入を防ぐため、開口部に防虫ネットを展張する。育苗期の被覆も有効である。ほぼ完全に侵入を阻止するには、目合い0.4mm以下の防虫ネットが必要である。
2 ほ場周辺の雑草を除去する。
3 粘着テープにより成虫を誘殺する。本種は特に青色に誘引される。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬を予防的に散布する。
※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
※アザミウマの生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。
2 キルパーを用いた病害虫まん延防止([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項の「キルパーを用いた前作の古株枯死、病害虫まん延防止」](#)を参照)([農薬登録情報](#))
3 くん煙剤の使用については、[共通防除の章の温室・ビニールハウスでのくん煙剤・常温煙霧剤の使用法の項](#)を参照する。
4 発生が予想される場合には、薬剤を施用(散布)する。

アブラムシ類

(耕種的・物理的防除)

- 1 育苗時からアブラムシ類の発生に注意する。黄色粘着テープを施設の出入口や開口部の近く、若しくは苗の近くにつるし、有翅成虫が飛来していないか確認する。
2 近紫外線除去フィルムは成虫の飛来を減らす効果があるので、これらのフィルムを施設の外張りやトンネルに使用する。
3 施設では、側窓や天窓などの開口部に寒冷紗や防虫ネット等を張り、成虫の飛来を防ぐ。
4 マルチをする場合は、シルバーポリマルチなど忌避効果のあるものを使用する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 気門封鎖剤を散布する。
2 くん煙剤の使用については、[共通防除の章の温室・ビニールハウスでのくん煙剤・常温煙霧剤の使用法の項](#)を参照する。
3 発生が予想される場合には、薬剤を施用(散布)する。

シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ

- ・ [共通防除の章のシロイチモジヨトウの防除の項](#)及び[ハスモンヨトウの防除の項](#)を参照する。

(耕種的・物理的防除)

- 1 シロイチモジヨトウ成虫は長距離移動する可能性があるため、周辺の発生ほ場からの飛来も十分考えられる。したがって、施設などでは防虫網を設置し、成虫の侵入を防止する。
- 2 交信かく乱剤（下表）を活用した防除を行う。
- 3 早期発見に努め、卵塊や分散前の若齢幼虫を捕殺する。

（薬剤防除） [農薬登録情報](#)

- 1 シロイチモジヨトウは薬剤抵抗性が発達しており有効薬剤は非常に少なく、また幼虫は2齢になると、ねぎなどでは葉に穴を空け葉内に潜り込んで食害するため、薬剤散布を実施する場合も散布適期が非常に短い。そのため、ほ場での発生をよく観察し、幼虫のふ化に合わせて薬剤散布を実施しなければならない。
- 2 交信かく乱剤を活用する。
- 3 若齢幼虫期のうちに、薬剤を施用（散布）する。

ハダニ類

（薬剤防除） [農薬登録情報](#)

- 1 気門封鎖剤を散布する。
- 2 くん煙剤の使用については、[共通防除の章の温室・ビニールハウスでのくん煙剤・常温煙霧剤の使用法の項](#)を参照する。
- 3 発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。

タバココナジラミ

・[共通防除の章のコナジラミの防除の項](#)を参照する。

※TYLCVを媒介する。

（耕種的・物理的防除）

- 1 特にタバココナジラミは薬剤抵抗性が発達しているため、以下に挙げる予防策を基本とした総合防除を行う。
- 2 寄生範囲が広いので、ほ場内外の雑草防除などほ場衛生に努める。
- 3 施設では成虫の侵入防止を徹底する。0.4mm目以下の防虫ネット、紫外線カットフィルム、反射資材等の利用が有効である。
- 4 夏期には露地においても発生が多くなるため、秋期より栽培（定植）の始まる作型では、施設内への成虫の侵入防止対策が特に重要である。
- 5 育苗期の防除に努め、コナジラミ類が寄生していない苗を定植する。鉢物など、栽培に関係のない植物は、施設内に持ち込まない。
- 6 連作する場合には、作と作の間に施設内に植物が存在しない期間を設け、コナジラミ類がリレーされることを避ける。
- 7 施設での発生予防のために黄色粘着テープを使用する場合は、侵入防止を徹底したうえで、施設の出入口や側窓付近に張り、定期的に変換する。
- 8 作物上に寄生したコナジラミの施設外への逃亡・拡散を防止するため、収穫後の残さは、キルパーの処理や施設の密閉（蒸し込み）により、枯死、乾燥させた上で処分する。

（薬剤防除） [農薬登録情報](#)

- 1 早期発見、早期防除に重点を置く。薬剤効果に差があるので、両種の区別を的確に行う。薬剤散布を行うに当たっては、葉裏に寄生している幼虫、蛹にも必ず薬剤がかかるよう丁寧に十分な量を散布する。さらに、薬剤が株全体によく到達するように下葉の処分を早期に行うなど工夫する。
- 2 気門封鎖剤を散布する。
- 3 キルパーを用いた前作の古株枯死（[共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項の「キルパーを用いた前作の古株枯死、病害虫まん延防止」](#)を参照）（[農薬登録情報](#)）
- 4 発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。